

- 4 -

守るが、同時に非マレー人の利権をも守るのである。したがってマレーシア人の銘々が国内の平和と安全を守るため憲法を尊重し、それを誇りとしなければならない。」 — 1969・9・ Kota Bharuにて。

台湾鄭氏残党の南ヴェトナム移住について

陳 荆 和

(1), 大南寔録前編及び其他の阮朝史籍に見える明将竜門総兵楊彦迪, 副将黄進, 高雷 簾総兵陳上川, 副将陳安平等が兵三千余人, 戦船五十余艘を率いて, 中部ヴェトナムを支配する阮主(阮福瀨, 即ち賢主, 1648-87)に帰投して, その命によって東浦地方(当時のカムボジア東南部)に入殖したとの記事は, 実は台湾鄭氏配下の楊彦迪(楊二)の率いる礼武鎮水軍を中心とした東寧政権の残存部隊の南下を指すものであって, その南下の目的は多分に鄭克塽のカムボジア亡命を準備するためのものと推察され, 東浦(美湫及び辺和)に入殖した年代も1682年末から1683年5月にかけての時期であり, 寔録前編に見える賢主(己未31年(1679)正月)ではない。

(2), 南下の鄭氏残党(俗に竜門部隊と称す)は阮主のバックするカムボジア二王の匿嶽に味方して, シャムの擁護する正王匿秋に敵対するが, 1685年初めには黄進によって楊彦迪が殺害される。義主(1687-91)は黄進の自主的傾向を放置出来ず, 枚万竜を主将とする討伐軍を南下せしめ, 1689年3月ごろ, 外匡郎(前江河口)にて策略を用いて黄進を倒し, 阮軍は正王の据る幽東(Oudong)に進撃する。黄進失脚のあと, 陳上川が竜門部隊の主将となって阮府に協力するが, カムボジア側の和平工作で阮軍は作戦目的を達しないままに1690年撤退する。しかし陳上川の竜門部隊は独力を以て工代馬(前江河口のCou Tau Heas)を守り, 阮軍のための橋頭堡を確保する。その実力は大船6, 7艘に人数4, 5百名と云うところ。

(3), 明主は1698年, カムボジアに於ける勢力の失墜を挽回すべく, 阮有鏡派をして正王に阮府に対する朝貢の恢復を要求するが, 拒絶されたため, 二年后(1700), 阮有鏡が主将となって遠征軍が南下する。この際陳上川は阮府水軍の大將として南榮(Phnom Penh)を占領するが, 主将阮有鏡の陣歿により, 阮軍は退いて, 柴棍(Saigon), 辺和及び婆地(Baria)を占領することとなり, 阮府はこの占領地に嘉定府を設置, 福隆, 新平の二県と鎮辺, 藩鎮の二營を附属せしめ, 別に清河, 明香の二社を設けて, 鎮辺と藩鎮に居留する華商と華僑を収容した。これが有名な嘉定府の設立であって, 阮府がカムボジアの土地に設置した最初の行政, 軍事組織である。その設置年代は1700年が正しく, 寔録前編の1698年ではない。

(4), 嘉定府設立の際, 陳上川は鎮辺營の総兵に任ぜられ, 1714年には藩鎮の都督に昇進しているが, 1715年5月頃病死する。陳上川の功績は阮府に対する協力, 赫々たる戦功以外に, 辺和及び柴棍両都市の建設者として重視せねばならぬ。柴棍がほゞ今日のショロンに当り, 南越華僑及び商業活動の大中心なることをを想起すれば, 南越の経済基礎は陳上川配下の竜門部隊の手によって始められたと云って過言ではない。

(5), 陳上川卒後, その子の陳大定が竜門部隊の指揮をとり, 引続き阮府に協力する。しかし中傷に会って, 1733年初, 広南で獄死する。この悲劇のあと, 陳大定の子, 大力は母とともに, 河仙に参り, 母方の叔父である河仙都督鄭天賜に頼り, のちに, 大力は河仙勝水隊の該隊として活躍する。陳大定の獄死により, 竜門部隊は解散せられ, こゝに, 50年に亘る活動の幕を閉じることとなった。

(6), 竜門部隊は阮府の軍隊には編入されず, 阮府の傭兵でもなく, 所謂「外人部隊」でもなく要するに楊彦迪や陳上川に率いられた移民の自衛的武装集団であって, 自己存続のため, 阮府の駆使するに甘んじ, カムボヂャやシャムの軍隊と戦った。その性格はのちの西山政権に協力した李才の和義軍や李阿集(集亭)の忠義軍に似ている。

(7), 年代から云っても, 阮主の南北戦争は1673年春を以て終結し, 暹江を界として南北長期停戦の時期に入り, 阮主としては今まで蓄積されていた戦力を利用して南方に発展する機運になっていた。かゝる機運があったからこそ, 台湾鄭氏残党の移民集団は阮府に受容られたのであり, 彼らの利用価値もそこにあった。賢主がかれらをカムボヂャに入殖せしめたのは東浦地方の開拓よりも正王匿秋及びその背後にあるシャム勢力に対抗せしめるのが本当の目的であるとするべきである。この点, この移民集団がヴェトナム人の南進に極めて重要な貢献をなしたことは疑いない。しかし阮府の彼らに対する態度は極めて冷酷にして現実的であり, 極力その人力, 戦力は利用するが, かれらに自立的傾向があると直ちにこれを排除した。その点, 同じく阮主配下である河仙に対する態度とは大いに異なる。河仙は鄭玖・鄭天賜親子に自立政権の存立を許したのに反して, 竜門部隊にはこれを許さなかった。これは矢張り, 政略的, 戦略的原因によるもので, 阮主はカムボヂャ東南地区(つまり, 嘉定府, 今の南ヴェトナム東南部)では“Greater Vietnam”の実現を期したので, こゝに異質的な政権の出現を許さず, これに反して, 河仙はシャム, カムボヂャ, 阮府三勢力の交接する地点にあり, その国際性格は強く, 阮府としてはこれをシャムに対する緩衝地区として利用したかったからであろう。

(8), 史料利用の面から云えば, 拙考を通じて, 越南近世史の研究にとって基本史料である寔録

— 6 —

前編の年代に関する記載に可成りあいまいな個処のあることが認められ、そのまま鵜呑みに受取れないことが痛感された。即ち、17、8世紀の阮主時代史を研究する場合、中国史料及び欧文史料との厳密な参照と勘考は不可欠であり、特に政治的立場や宗教的偏見にとらわれない同時代の中国商売の実見に基く華夷変態の如き邦文史料の利用価値は極めて高いと云はねばならぬ。

ビルマ学会の趨勢について

大野 徹

ビルマにおける学術研究の現状を、1) 大学、2) 学会の二部に分けて御報告申し上げたい。

1) 大学

従来、ビルマには二つの総合大学があった。一つはラングーン、もう一つはマンダレーである。ラングーン大学は、1878年カルカッタ大学の予科として発足、1920年に大学に昇格した。マンダレー大学は、1925年ラングーン大学の予科として設置され、1958年総合大学になった。この両大学のほかに、モールメン、パテイン、マグウェー、タウンヂー、ミッチーナーの5予科大学があった。

1962年登場した革命政府は大学制度の改革を行い、1964年新制度に基く大学が誕生した。新制大学の理念は、「大学教育法」によれば、1) ビルマ式社会主義国家の建設に参加する知識人の育成、2) 社会主義制度確立に寄与し得る研究活動の二点にある。

こうして、現在ビルマには、次の19の大学が設置されている。これら単科大学の大部分は、旧制大学の学部が独立したものである。

大学名	所在地	学 長	年限
1) ラングーン第一医科大学	ラングーン	ウー・バタン	7年
2) ラングーン第二医科大学	ミンガラドン	ウー・エー	7年
3) マンダレー医科大学	マンダレー	ウー・マウンマウンヂー	7年
4) 歯科大学	ラングーン	ウー・アウンタン	6年
5) 薬科大学	ラングーン		
6) 工業大学	ラングーン	ウー・ヨンモウ	6年
7) 経済大学	ラングーン	ウー・エーフライン	4年
8) 教育大学	ラングーン	サンミン中佐	5年